

奨励研究報告書

研究課題

数寄屋師・木村清兵衛文書のアーカイブ研究

東北工業大学工学部建築学科講師

中村 琢巳

研究課題の概要

江戸時代末期から明治、大正、昭和と四代にわたり活躍した数寄屋師・木村清兵衛歴代については、これまで中村昌生氏、矢ヶ崎善太郎氏、桐浴邦夫氏などによる多くの研究成果がある。木村清兵衛が「裏千家出入り」の棟梁であり、かつ近代では東京を中心とした有力な「近代数寄者」の茶室を数多く手がけたためである。こうした近世から近代にまたがる数寄屋師の存在は希少であり、作品研究や作風の特徴にわたり、多くの論考がなされている。しかしながら既往研究は、断片的な資料に基づいて論じられていたり、現存する作品の総合的な把握にはいたっていないのが現状である。

これに対して本研究は、木村清兵衛文書の全貌を記録化するはじめてのアーカイブ研究である。木村清兵衛文書は図面、起し絵図、仕様書、備忘録、写真帳、書簡等にまたがる多様な内容をもつ。本研究による史料整理を進めるなかで、歴代にまたがる木村清兵衛文書が七百点におよぶ膨大かつ貴重な史料群であることが確認された。本研究課題の主眼は基礎的なアーカイブであり、文書の写真撮影など目録化を重視した。

一方、アーカイブから分析できる各論的なテーマについても、図面描写法や交友関係（施主である数寄者、職人）などの視点からの展開もみえたきた。今後さらに研究を進めることで、現存する茶室と古図面やスケッチとを比較分析し、木村清兵衛の作風（デザイン、技法の特色）についての研究も想定されるものである。

まず、木村清兵衛について、歴代の業績を代表する作品にもとづきながらみておこう。

木村清兵衛歴代について

木村清兵衛は江戸時代末期から昭和にいたるまで、裏千家出入りの数寄屋師として活躍した名工である。堂宮大工であれば、幾代にもおよぶ老舗は多い。だが、数寄屋師となると、木村清兵衛ほど連続と活躍を遂げた家柄は少ない。長きにわたる継承というテーマが、木村清兵衛研究のひとつの着想である。

初代から四代目まで、木村清兵衛の仕事の中心を占めたのが裏千家ゆかりの茶室普請であった。初代の留次郎（元治元年没）は、裏千家十一代家元・玄々齋が利休二百五十回忌（天保十年）にあたり計画した裏千家京都屋敷の増築に携わった。いまに伝わる利休堂、咄々齋、表門等がこのときにつくられた。これら普請の功績が認められ、玄々齋自作の竹二重切花入（銘「棟梁」）が清兵衛へと贈られている。

続く二代目の幸次郎（弘化二年〜大正四年）もまた、裏千家出入りの仕事を引き継ぐ。同時に、明治の近代化という時流を捉えた仕事をした。そのひとつが、立礼の開発に携わったことである。裏千家玄々齋は明治五年の京都博覧会で伝統的な茶室を革新し、椅子で外国人でも茶の湯が楽しめる立礼式を考案した。家元の構想に基づき、新時代にふさわしい立礼式用具を制作したのが二代目清兵衛であった。もうひとつは、京都から東京への進出である。明治二十年、二代目は東京の井上馨邸への東大寺四聖房の茶室移築に携わった。これを契機に、東京の近代数寄者たちの知遇を得て、木村清兵衛の活躍の舞台が東京へと広がったのである。

三代目の芳次郎（明治四年〜昭和三十年）は、裏千家の棟梁たる木村清兵衛の作風に新風を加味し、歴代のなかでも目覚ましい活躍を遂げた大工である。加えて、その作品群も比較的現存するものが多い。

二代目が亡くなると、裏千家の普段の出入は岡田米斎・永斎親子へ託され、三代目清兵衛の仕事は、京都から東京へと重心が移っていく。この時期の作風をみれば、賑やかな意匠を盛り込んだ名席（本歌）の写し、選りすぐりの銘木・銘竹の多用、近代的補強技術を用いた丸太の精緻な組立などが指摘できる。まさにこうした作風は、茶の湯の新時代を切り開いていた大正・昭和期の近代数寄者たちの期待に見事にこたえるものであった。そのため、木村清兵衛は鈍翁・益田孝、即翁・畠山一清、箒庵・高橋義雄といった名だたる数寄者たちの邸宅や茶室を手掛けていく。そのなかで畠山一清邸に手掛けた茶室が、現在の畠山記念館（東京都港区）に「翠庵」として伝わる。静寂な三畳台目席のなかに、端正な古材と銘木の組み合わせをみることが出来る。

さらに三代目は、新時代の数寄屋師の息吹を感じさせる取り組みをはじめた。それは博覧会への茶室出展という試みである。産業振興を目的とした博覧会において、職人自らが設計意図を盛り込んだ作品として、茶室をつくった嚆矢が三代目清兵衛であった。その最初の出展は大正三年の東京大正博覧会といわれ、裏千家利休堂（初代清兵衛作）を写した茶室「正築庵」を制作した。現在、諦聴寺（東京都渋谷区）に伝わる「花雲」は、昭和八年の万国婦人子供博覧会で三代目が出展した茶室が移築されたものである。後水尾天皇好み「燈心亭」（水無瀬神宮）を写し、銘木と銘竹を凝らした「七草の天井」をもつ。古典的名作の写しを得意とし、簡素な中に銘木・銘竹を多用する作

風がここでも発揮された。三代目はこうした博覧会出展にとどまらず、学校内の茶室、近代的なデパートの一角に設けられた茶室なども手掛けた。茶家や個人邸の茶室をこえて、多数の人々が利用できる公共的茶室へも仕事を広げていったのである。

昭和戦後は四代目の喜三郎（明治三十三年～昭和四十五年）の時代となった。四代目が昭和三十二年に手掛けた裏千家今日庵東京道場こそ、江戸から明治、大正、昭和に連なる歴代清兵衛の足跡が結実した作品といえよう。幸いなことに、この東京道場は現在、山野美容芸術短期大学（東京都八王子市）へ移され、「愛治庵」として見事な茶苑を伝えている。木村清兵衛のお家芸ともいえるべき裏千家ゆかりの名席写しが連なり、裏千家を代表する又庵、寒雲亭、咄々斎（初代と二代目清兵衛の作）といった名作が、アレンジを加えながら再構成されている。

普請文書からみた木村清兵衛

木村清兵衛歴代の流れを上記のようにみていくと、その共通する作風として、裏千家京都屋敷の茶室群に代表される名席の写しが指摘される。裏千家出入りとして、歴代が造営や修理を通じ、本歌の仕様や寸法に熟知していたからである。この視点は、木村清兵衛文書のアーカイブ作業を通して、より具体的に実像がみえてきた。

すなわち史料にみられるさまざまな「実測図」「実測寸法帳」の存在である。文書には数多くの絵図面が収録されていた。描画形式としては、平面的な指図、寸法入りの詳細図、立体的な表現の起し絵図、近代の図面制作法である青焼き図など多岐にわたる。こうした図面制作法による分類をさらに「設計図」と「実測図」に分類しうることがわかった。「実測図」とは古典的な名席に実際に調査し、図を描き、寸法をはかった結果を記載する形式のものである。こうした実測図の分析を積み重ねることで、木村清兵衛が理想として考えていた傾向を明らかとし、古典的な作品をどのように学び、どのように設計へと結実していったのか、今後、さらに研究を進められると考えている。

現在、この着想で注目しているのが、起し絵図のような立体的実測図の形式が、本文書に多く収録されていることである。通常、起し絵図といえば、建築図面を読み取ることが難しい茶人や施主に対して、茶室の完成イメージを大工が伝えるコミュニケーションの描画手法として理解されている。けれども、木村清兵衛文書に収録された起し絵図の多くは、こうした背景で制作されたものではないようである。

なぜなら、通常の起し絵図のように、紙の先端に爪が付き、立体的に組み立てられる史料形式をもたないからである。茶室の東西南北の壁面を別個に、二つ折りにした紙の表裏へと、その材料や寸法を書き留めていく形式のものが多い。それを、席名の表題を記した包紙で保管していた。この形式は、他者へみせるためのものではなく、あくまで大工自らが参照するための備忘録的な史料とみられよう。このほか、手帳形式に、裏千家京都屋敷の茶室の仕様・寸法を控えていく形式の史料もあって、古典作品の受容という研究テーマが、本研究課題を進める中で明確化してきた。

こうした歴代の共通項とともに、木村清兵衛の特色として、各代がきわめて個性的な活躍を遂げた点もみのがせない。京都を中心に仕事をした初代、二代目、東京に重心を移した三代目、四代目という地域的な違いとともに、千家出入りの初代、二代目、近代数寄者お抱えの大工として頭角を現した三代目というように、出入り関係の違いもあった。さらに、文書からみても、二代目は和紙に墨書きする伝統的な図法を駆使したのに対して、三代目の史料では青焼き図面が登場するというように、制作図法も歴代で異なるものであった。

本研究課題では、文書の膨大な量から、写真撮影やリストづくりという基礎的なアーカイブ作業を中心に取り組んだ。今後は、こうした歴代の共通項と違いという視点から、アーカイブされた史料群の評価分析を進めていきたい。さらに、史料に収録された作品のうち、どれほどの建築が現存するのか、建造物調査も今後の課題として残されている。

これに加えて、木村清兵衛の手掛けたスケッチや図面などの資料群は、歴史的価値を有するにとどまらない。専門家ではない人々にも、茶室の関心を喚起しうる視覚的にも見ごたえある資料である。つまり古図面や写真、スケッチなどは、茶室を建てた大工の資料群として、茶道文化に関わる展示企画の有力なテーマたりうると思う。今後は、アーカイブに基づいた出版や展覧会などのアウトリーチの企画を通して、広く茶室やその数寄屋師の魅力を紹介することを目指していきたい。

最後に、文書自体のアーカイブという地道な基礎研究に助成を頂いたことに、深く感謝申し上げます。